

# 体験過程スケールによる リフレキシブ PCAGIP のプロセス研究

押江 隆・山根 倫也<sup>\*1</sup>・池ヶ谷采佳<sup>\*2</sup>  
坂本 和久<sup>\*3</sup>・玖村 奈美<sup>\*4</sup>・白石 潤一<sup>\*5</sup>

A Process Study of Reflexive PCAGIP with Experiencing Scale

OSHIE Takashi, YAMANE Tomonari<sup>\*1</sup>, IKEGAYA Ayaka<sup>\*2</sup>,  
SAKAMOTO Kazuhisa<sup>\*3</sup>, KUMURA Nami<sup>\*4</sup>, SHIRAISHI Junichi<sup>\*5</sup>

(Received September 25, 2020)

## 1. 問題と目的

PCAGIP法(村山, 2012)はPCAグループ(村山, 2014)とインシデントプロセスを組み合わせた事例検討法であり、「事例提供者の提出した簡単な事例資料をもとに、ファシリテーターと参加者が協力して参加者の力を最大限に引き出し、その経験と知恵から事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体的ヒントを見いだしていくプロセスを学ぶグループ体験である」と定義されている。心理臨床のみならず教育や産業など、様々な領域で応用され、一定の成果を収めている。

一方で、押江ら(2016)はPCAGIP法の課題として次の5点を指摘している。第1に、PCAGIP法では「絶対に批判しない」ことがグラドルールの1つとして設定され、質問をするように参加者に求められる。「批判しない」ルールや「質問をする」手続きは、事例提供者の安全を守る上で重要であるが、参加者の自由な発言を抑制している場合がある。第2に、人数が多い場合は二重のグループを用意する「金魚鉢方式」が採用されているが、この方式だとグループの内と外とで発言できる機会が大幅に異なってしまう。第3に、参加者全員が1人1問ずつ質問する「4球方式」が採用されているが、しばしば質問を思いつかない参加者がいる。第4に、PCAGIP法で扱われる事例は多くの場合、その場のメンバーのほぼ全員がまったく知らないか、知っていたとしてもよく知らないものである。知らないからこそ、参加者全員が不

明な点を質問し、それを理解しようと努めることで、事例提供者に「わかってもらった」という感じが生じ、事例への向き合い方が変化すると思われる。しかし、たとえば学校現場でPCAGIP法を実施する場合、メンバーは同じ学校の教員であり、わざわざPCAGIP法を実施しなくても日常的な会話や普段の職員会議等で事例について話していることも多い。第5に、事例についての質問やアドバイスばかりになってしまい、事例提供者の気持ちを共感的に理解するような質問がなされないと、「質問責めにされて気分が落ち込んだ」といった感覚すら生じてしまう。したがって、事例ではなく事例提供者を主役(村山, 2012)とするような工夫が必要である。

押江ら(2016)は以上の問題意識から、PCAGIP法の新しいフレーバーとして、以下の8ステップからなる「リフレキシブPCAGIP」を開発している。リフレキシブPCAGIPでは、人数が多い場合でも金魚鉢方式を採用せず、参加者全員がホワイトボードの見える位置に円座する。

1. 従来のPCAGIP法と同様、事前に事例提供者に事例の概要をごく簡潔に(200字程度)書いてもらう。この事例資料をコピーして参加者全員に配布する。
2. セッションが始まったら、ファシリテーター(以下「fac」と表記)が2つのグラドルール(「メモを取らない」、「事例提供者を批判しない」)を提示し、確認する。

\*1 関西大学大学院心理学研究科

\*2 平成30年度山口大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース心理学選修卒業生

\*3 山口県精神保健福祉センター

\*4 山口大学教育学部附属山口小学校

\*5 高知市立春野東小学校

3. 事例提供者は資料を読み上げながら事例について簡単に説明する。このとき、セッションでどのような話ができたらよいかといった、事例提供者がその事例を出した目的をあわせて話してもらう。
4. facは参加者のうち5～7人程度から1人1問ずつ質問を募る。このとき順番を決めずに自由に質問してもらう。このとき参加者からの発言はコメントやアドバイスではなく、あくまで質問に限定する（グループパート）。
5. facは事例提供者と1対1で向き合い、パーソン・センタード・スーパービジョン（以下“PCS”と表記；押江，2015）を行う。その目的は、傾聴を通して事例提供者が自らの体験過程に触れ、推進するのを促すことである。具体的には「いろいろと質問を受けてみて、いまどんな感じがしていますか？」のように尋ね、事例提供者の語りをパーソン・センタードな態度で聴いていく。この間、他の参加者は事例提供者とfacのやり取りを見守り、一切発言しない（PCSパート）。
6. facが事例提供者の気持ちをおおむね理解できたと判断し、事例提供者とも合意が得られたら、再びグループに戻り、参加者のうち5～7人程度から1人1つずつ発言を求めます。このときは質問だけでなく、コメントやアドバイス等も可とする。4. と同様、順番を決めずに自由に発言してもらうが、同じ参加者の発言が相次ぐ場合、まだ発言していない参加者の発言を適宜促す。また、このときは参加者の発言が長くなりがちなので、facが適宜要約して事例提供者に伝える。コメントやアドバイスであっても、1人の参加者が発言したら事例提供者がそれに応じるようにする。事例提供者が応じる前に別の参加者が矢継ぎ早に発言した場合は、facが制止する（グループパート）。
7. 再びfacと事例提供者とが1対1で向き合い、PCSを行う。その目的は、事例提供者が参加者から受け

た質問やコメント、アドバイスを消化すること、体験過程に触れながら自らの方向性を定めることである。具体的には「いろいろな発言を受けて、いまどんな感じがしていますか？」のように尋ね、事例提供者の語りをパーソン・センタードな態度で聴いていく。このときfacにコメントやアドバイス等が思い浮かんだらそれを伝えてもよいが、「こういうことを言われてみてどんな感じがしますか？」などと確認することで、押しつけにならないように注意する。5. と同様、この間、他の参加者は事例提供者とfacのやり取りを見守り、一切発言しない（PCSパート）。

8. 必要に応じて6. のグループパートと7. のPCSパートを繰り返す。終了時刻になったら終了とするが、必ずPCSパートで終わるようにする。時間があれば各参加者に感想を求めますが、このとき質問やコメント、アドバイス等ではなく、あくまで参加した感想を述べてもらうようにする。

リフレキシブPCAGIPの最大の特徴は、グループパートとPCSパートを行ったり来たりする点にある。河崎（2013）は個人療法の文脈で、クライアントが話していることをセラピスト自身がどのように感じているかを「振り返って観ながら」理解を浮かび上がらせているあり方がクライアントの体験過程を促進する上で必要であると述べ、このようなあり方を「リフレキシブ・モード」と呼んでいる。また「リフレキシブ・モードはセラピストに限らず、クライアントにも重要な様式」であり、「セラピーにおける理解とはクライアントとセラピストが共にリフレキシブになることで推進される」と述べ、セラピストとクライアントのモードの組み合わせについて、図1に示したような4つのパターンを提示している。

リフレキシブPCAGIPの場合、PCSパートでfacがリフレキシブ・モードで事例提供者に回答することで、事例提供者もリフレキシブ・モードになり、さらにそれを見守っていた他の参加者もリフレキシブ・モードになると

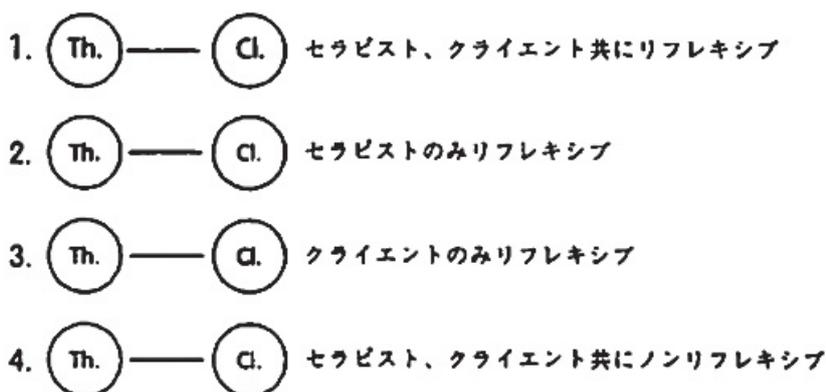


図1 リフレキシブ・モードの4パターン（河崎，2013）

考えられる。しかし押江ら（2016）は事例研究にとどまり、そのプロセスを詳細には検討していない。

そこで本研究では、PCAGIP法にPCSを組み合わせることで、事例提供者は実際にリフレキシブな方向へと進むのかを、体験過程スケールを用いて検証することを目的とする。ここで体験過程スケールを用いるのは、河崎（2013）が「（体験過程スケールは）話し手がどの程度リフレキシブに話しているか、その程度を測定していると解釈できる」と述べているためである。

## 2. 方法

### 2-1 評定対象

評定対象は、ある大学院の講義で実施されたリフレキシブPCAGIPの1セッションの録音記録（71分20秒）とその逐語記録である。6名の参加者がおり、うち4名が女性、2名が男性であった。事例提供者は20歳代前半女性、facは30歳代後半男性（第1筆者）であった。なお、池見ら（1986）は4～8分のセグメントを抽出してそれぞれのピークとモードを評定しているが、本研究は全体のプロセスを検討することを目的としているため、セグメントを抽出せず事例提供者の事例にかかわるすべての発言を評定対象とした。逐語記録の作成にあたっては、全参加者の発言に通し番号をつけた。全発言数は126であり、そのうち事例提供者の事例そのものにかかわる40の発言（ただし参加者へのお礼の発言等は除く）を評定した。以下に本セッションの概要を示す。

事例提供者から出された本事例のテーマは「自分が将来どんなセラピストになりたいか」というものであった。事例提供者は、日頃のカウンセリングの経験から、以下の3つの点について悩んでいた。

1. カウンセリングの中で、クライアントに質問をするとき、自分の興味本位で聞きすぎている気がするが、クライアントにどのくらい聞いていいものか分からないこと。
2. カウンセリングの時に、自分の感じたことを相手に伝えることを大切にしたいが、それがクライアント

を誘導していることにならないか。

3. 自分は、自分の感じたことを相手に伝えることが苦手であるということ。

以上の3点を取り上げ、将来自分がどのようなセラピストになりたいかを考えたいとのことであった。

本セッションは、グループパートとPCSパートをそれぞれ3パートずつ、計6パートから構成されていた（図2）。グループパート1（G1）では、まずfacからグラドルールの説明があり、事例提供者から事例の説明があったあと、参加者から事例提供者に質問が出された。このパートでは、アドバイスや感想ではなく、質問のみを求めた。たとえば以下のようなやりとりがあった（括弧内の数字は発言の通し番号、以下同様）。

参加者D（24）「自分の興味でっていうところで、ここは、どういうことですか？ どういうことですかっていうか、はい。」

事例提供者（25）「結果的に、クライアント役の方に、ためになるようにしたいけど、ためになるというか、うーん、ためになるようなことにつながるといいなって思うけど、だめ、状況をつかむために聞いていることであっても、自分が気になるからっていう、自分が不安を解消したいってというのが、先に来てるのかなっていう意味で、自分の、相手のことっていうよりは自分の興味を、こう、優先して聞いてしまってるかなっていう、感じですよ（笑）。」

fac（26）「相手のニーズよりは、自分の興味関心が先にあって聞いているのではなからうかって。その、自分の興味関心というのは、不安から来てるんじゃないかな、そんな気がするんですね。」

次のPCSパート（S1）では、facと事例提供者が2人で話をし、参加者はそれを見守る。S1では、事例提供者の不安や自信の無さは、どのような感じなのかについて話された。

fac（40）「なんか、自信がないのかなって、感じるんやね。自分がしたことについて、あとで振り返ったときに、あれでよかったのかなっていうふうに、気になっちゃうっていうか、なんかそんな気がして、うーん、こう、なんとなくそこが、自信がないというか。……ねえ、自信がない、かあ……。うーん、始めたばかりだからねえ、カウンセリングってねえ。自信がないっていうのは当然だろうなあという気もするけど、うーん、いろんなものに自信がないってあるわけかな（事例提供者：あー）。伝えるのが苦手とか（事例提供者：うーん）、ねえ。」

事例提供者（41）「あっ、そうですね。うーん、難しい……。考えすぎる。」

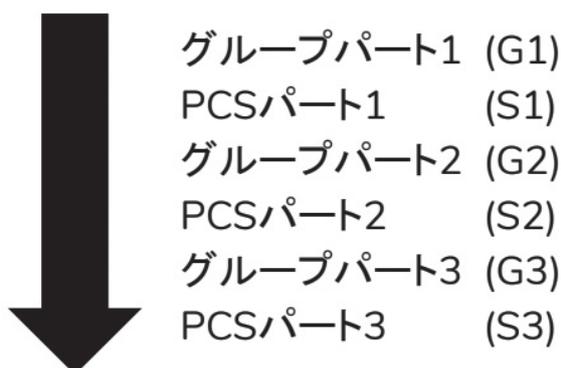


図2 本セッションの構成

fac (42) 「あー、考えすぎ。うんうんうんうん。  
……考えすぎちゃう感じがする。うんうん。なる  
ほどね、どんな感じだろう、くよくよしちゃう感  
じ？」

事例提供者 (43) 「うーん、なんだろう……。言葉が  
飛び交ってる感じですね (fac: 言葉が飛び交って  
る感じ)。それをいつもこう、見てる。」

fac (44) 「あーそんな感じ。うんうんうんうん。」

事例提供者 (45) 「たとえばなんか、ああ今日雨だ  
なあ、歩いて行くのめんどくさいなあ、けど自転車  
で行かないと帰り寒い、だから歩いて帰るのやだな  
あ、友だちに車お願いしようかなあ、でも時間的に  
(笑)。そういう感じ。」

fac (46) 「あー。なんかいろんなアイデアが浮か  
ぶんだけど、なんかつかまえないという  
か。」

(中略)

事例提供者 (51) 「そうですね。1つの結果に対して  
たぶん自分の中にたくさん選択肢というか、言葉と  
かわーっと出てくるんですけど、それがたぶんなん  
か使えないというか。」

次に、再度グループパート (G2) に戻る。これ以降  
は、質問だけでなく、アドバイスや感想などの発言も認  
められる。G2では、参加者から、事例提供者がこのよ  
うな悩みを持っていたことに驚いたという感想が多く語  
られた。

参加者 D (79) 「なんか、僕も B さんとおなじで、  
意外だなんて、意外だなんていうか、感じて、な  
んていうか、すごく、伝えるのが上手というか、す  
ごく丁寧な人と、なんか関わっている人、だなんて  
いう印象を僕は持っていて、で、うん、なんか、う  
ん、なんていうか、すごく自分、事例提供者さん  
の中で、吟味した上で人に対してなんかこう、伝え  
たりしているっていうイメージっていうか、なので、  
うーん、そうですね (笑)、気にしてるからこそな  
んかこういう、自分の興味で聞きすぎてるんじ  
ゃないかとか、誘導してしまってるんじゃないかとか、  
もっとうまく伝えられるものがあるんじゃないか、  
この選んだ言葉でよかったのかというような、いう、  
なんかそういう、のが出てくるのかなっていう、ふ  
うに、はい、思って。なので…… (fac: 丁寧に関  
わって、あ、ごめん、続けて)、あ、いえいえ、そ  
うですね……。うん、僕は、そんな感じです。」

fac (80) 「丁寧に関わってるからこそ、丁寧に吟味  
してるからこそこう、いろいろ悩んだりとか考えた  
りとか、振り返ったときにいろいろするのかなあ、  
そんな気がする。それであってる? (参加者 D:

そうですね、大丈夫です)。うん、うん。どうで  
すか?」

事例提供者 (81) 「丁寧 (笑)。自分が思ってるのと  
人が思ってるのは違うんだなっていう (笑)。」

次の PCS パート (S2) では、事例提供者から「自分は  
丁寧というより、遅いのだ」ということが語られ、それ  
を受けて fac より「遅いというのを逆に武器にできるの  
ではないか」という発言があった。

事例提供者 (93) 「そういう関係性とかのぶんにつ  
ながると思うんですけど、授業とかってコロコロコ  
ロコロ変わったりとか議論してるのをみんなでこ  
ろんな意見を言いながらこう変わっていくのに、ひ  
とずつ私は立ち止まって考えてしまうので、これ  
どうなのかなって思ったときには次の話題にいつ  
たりするので (fac: なるほどね)、そういう意味  
ではもう少し、こう速く、速くなりたいたなってい  
うのはあるんですけど。そういう場ではなくて、例  
えば数人とかでいるときだったら、特にそういうこと  
もないとか、時間も制限もなくて、ゆっくりした場  
だったらたぶん、みんな待っていてくれたりしてい  
るので、言えるのかな (fac: ふーん。そっかそっ  
か)。それを見て、ちょっと私はそういう部分は  
働くときには、もう少しこう、ハッと言えように、  
なりたいたとは思います。」

fac (94) 「なるほどね、はあー (参加者 A: 気にな  
る (笑)。事例提供者: (笑)。参加者 D: すいま  
せん (笑)) はー、なるほど。丁寧さって裏を返す  
とそういうことなのかなって気もしたので、それ  
って事例提供者さんの将来のなりたいカウンセラーを  
考えるのにつながるのかなと思ったんだけど、どう  
ありたいんだろうね。」

(中略)

事例提供者 (99) 「そうですね、いや、うーん、カウ  
ンセリング場面ではちょっとよくわからない。」

fac (100) 「わからない。うんうん。なんか、これは  
僕の実感だけど、クライアントさんが、こう、待  
ってほしいタイプの人の時とかって、こっちが先々  
言っちゃうと困られるだろうから、じっくり丁寧に  
待ってくれる人がいたり、一生懸命遅いながらも吟  
味してくれる人がそこにいると、ありがたいら  
うなっていうのを、僕はいまそんな感じがして。そ  
の遅いっていうのをなんか武器にできないかなって。  
うん、なんかそんなことを感じながら聞いていた  
んだけど。なんかたくさん言葉が思いつくって言  
ってたけど、それもすごく武器になるんじゃないか  
なって思って。なにも思いつかなくて困ると、た  
くさんあって困るっていうのは意味合いが違う  
気がする

から、うん。そのたくさんある中で困る姿というか、その中でなんとかこう伝えようと頑張っているところって、クライアントさんにとっては役に立つというか、うれしい場面ってあるんじゃないかなあって、ぼくはそんな感じがしたんだけど、うん、どうかな。ぼくの勝手な考えだからね。」

事例提供者 (101) 「うーん。活かせていきたいなと思いました。考えすぎなところとか選択肢が多いのとかも。うん、ちょっとマイナスに捉えている部分のほうが自分の中では多いので、それをもう少し、肯定的に捉えてそれをカウンセリングの中で活かせるようになったら、自分が目指しているものに近づけるのかなって、思います。」

そして、次のグループパート (G3) では、これまでの話から事例提供者に参加者からアドバイスがなされた。

参加者C (105) 「じゃ、はい。丁寧とか周りが思っていて、自分はそう思ってないって言ってんですけど、たぶんさっきもいろんな言葉がたくさん飛び交ってるって言ってたので、なんだろう。あー、相手にピンポイントに当たる言葉って、絶対人によって違うって思って、いっぱい伝えても、いいんじゃないかなっていう、気はしました。だからそれでこう伝えて、そう、そうっていうのができたらそのそれだけ関係もできるなって思ったので、やっぱり不安になって言わないっていうのはすごい私もわかるので、なんか、せっかくなんかみんなでこうやってバーッてしゃべったので、そのバーッてしゃべったのを活かしたらもっと良くなるんじゃないかなみたいに思いました。」

fac (106) 「うん、いろいろ思っているのを、いろい

ろ伝えてみるのもありなんじゃないかってことだけで、どうだろうね。」

事例提供者「吟味のフィルターをちょっとこう少なく、して一つを出すっていうよりは、いろいろ出すのもいいのかなって思いました。」

fac (108) 「うん。他はどうですか。」

参加者B (109) 「吟味のフィルターがあっけいになって思いました(笑)。私は、こんなことも思っていて、あっでもこうかも、いやでもこうかもそうかもっとか言って、ねえどう思う? みたいな(笑)。なんか外にだしてしまうときにわーってなってるから、私は言って後悔することのほうが多いから、いいなって思って。そのフィルターちょっと1枚外したのちょうだい(笑)なって。」

そして最後のPCSパート (S3) で、今回の体験を通しての感想が事例提供者から述べられて終了した。

事例提供者 (124) 「……自分は考えすぎているなと思ったんですけど、結構偏っているなって(笑) (fac: ああ、そんな感じ)、とか思ったりとか。伝わってないなと思うんですけど、でもそれぞれの方にどう思っているかっていうのは何らかの形で伝わっているのかなって思って。それは一致しているかしてないかっていうのはあったとしても、みなさんはそれぞれきちんと受け止めてくださっているのだから、ありがたいなって (fac: あははは(笑)) 思いながら聞いていました。もう少し速くしゃべらないといけない場面は速くできるようにって目標も見えて、ちょっと悩みだった選択肢が多すぎる、伝えるのが苦手なんじゃないかっていうのを、ちょっとだけ前よりも肯定的にというか、ど

表1 5段階体験過程スケール (三宅ら, 2007) の評価基準

5段階EXPLレベル		7段階 (Klein, et al., 1986)
Very Low (VL)	話し手は出来事を語る(自分に関係のない出来事, あるいは自己関与がある出来事)が, 気持ちの表現はみられない。	1, 2
Low (L)	出来事を語る中に気持ちの表現があるが, 気持ちは出来事への反応として語られている。	3
Middle (M)	出来事への反応としてではなく, 自分のあり方を表明するように気持ちが語られている。豊かな気持ちの表現がみられるが, そこから気持ちを吟味したり, 状況との関連付けなどを試みたりはしない。	4
High (H)	気持ちを語りながら, その気持ちを自己吟味したり, 仮説を立てて気持ちを理解しようとしている。話し方には沈黙が見られることが多い。	5
Very High (VH)	ひらめきを得たように, 気持ちの側面が理解される。声が大きくなる, 何かを確信しているような話し方に変化することがある。	6, 7

表2 評定例

発言 No.	発言内容	評定者			
		①	②	③	④
17	うーん、何を考えているか。うーん、クライアントにとって、クライアント役の人とかクライアントの方にとって、それがどういうものなのかということ、私があまりイメージもできてなくて、いまいちよくわかんないなって思いが強いから、わかんないからっていう気持ちでたぶん、もう少しこの部分聞いてみようみたいな、とか、それで返ってきた答えに対して、こっちはどうなのかなっていう、疑問点がたくさんあるので、それを自分が、自分の中で整理したいのかなっていうのは、ありますね。そういう感じで聞いてますかね。	L ↓ 2	H ↓ 4	H ↓ 4	VL ↓ 1

うやったらそれを活かせるのかなっていう風な考えに、ちょっとこう、偏ってた考えが、平らになったというか(笑)(fac:平らになったと)、そういう風に見えるようになったかなと思います。」

## 2-2 評定者・評定の手続き

評定者は心理学を学ぶ大学院生2名(第4・5筆者)および学部生2名(第3・6筆者)の4名で、全員PCAGIP法およびリフレキシブPCAGIPともに未経験であった。

評定には三宅ら(2007)の5段階体験過程スケールを用いた。このスケールでは、表1に示したような基準に従い、"Very Low (VL)", "Low (L)", "Middle (M)", "High (H)", "Very High (VH)"の5段階でEXPレベルを評定する。これは、Klein, Mathieu-Coughlan, & Kiesler (1986)の7段階スケールをより使いやすくしたものであり、1, 2がVery Lowに、3がLowに、4がMiddleに、5がHighに、6, 7がVery Highにそれぞれ対応している。

事前に第1筆者が約4時間の評定練習を集団で行い、その後個別に本セッションの評定を行った。次に、各評定値のうちVLを1, Lを2, Mを3, Hを4, VHを5に変換し、池見ら(1986)や村山・樋口(1987)を参考に、各評定値の算術平均を求め、各発言のEXPレベルとした。たとえば表2に示したように、事例提供者の発言17を、評定者1はL, 2はH, 3はH, 4はVLと評定しているが、これをそれぞれ2, 4, 4, 1と変換し、その平均2.75をこの発言のEXPレベルとした。

さらに各パート(G1, S1, G2, S2, G3, S3)の代表値として中央値とピークを求め、評定値の信頼性を検討するためにEbel (1951)の級内相関を求めた。

## 3. 結果

事例提供者のEXPレベルの推移を図3に示した。各発言のEXPレベルの推移を実線で、各パートのEXPレベルの中央値の推移を点線で示した。また、各パートの中央値およびピークを表3に示した。Ebel (1951)の級内相関は $r_{44}=.70$ であった。

## 4. 考察

### 4-1 事例提供者はリフレキシブな方向へ進むのか

まず、PCAGIP法にPCSを組み合わせることで、事例提供者は実際にリフレキシブな方向へと進むのかどうかについて検討する。リフレキシブな方向へ動くのであれば、PCSパートを通してEXPレベルが高くなっていると考えられる。

図3および表3に示したように、G1ではVLからMの間を推移し、中央値は1.75、ピークは2.75であった。S1に入るとVLからHの間を推移し、中央値3.25、ピーク4.00と高くなっている。PCSパート(S1)から再びグループパート(G2)に入るとVLからMを推移し中央値2.13、ピーク2.75といったん低くなるが、PCSパート(S2)で再び高くなっている。S2では1回だけVLへと落ちるものの、それ以外はLからHの間を推移し、中央値3.13、ピーク4.00となっている。S2での高いEXPレベルがG3に入っても維持され、LからHを推移し、中央値3.00、ピーク4.00となっている。最後のPCSパート(S3)で、EXPレベル4.50で終了となっている。

グループパートのみに注目すると、G1では中央値1.75がS1を経たG2では2.13に、さらにS2を経たG3では3.00へと高くなっている。このことから、少なくとも本セッションにおいて、PCSパートは事例提供者のEXPレベルの向上に寄与していることが示された。すなわち、PCAGIP法にPCSを組み合わせることで、事例提供者はよりリフレキシブな方向へと動くということができらるだろう。

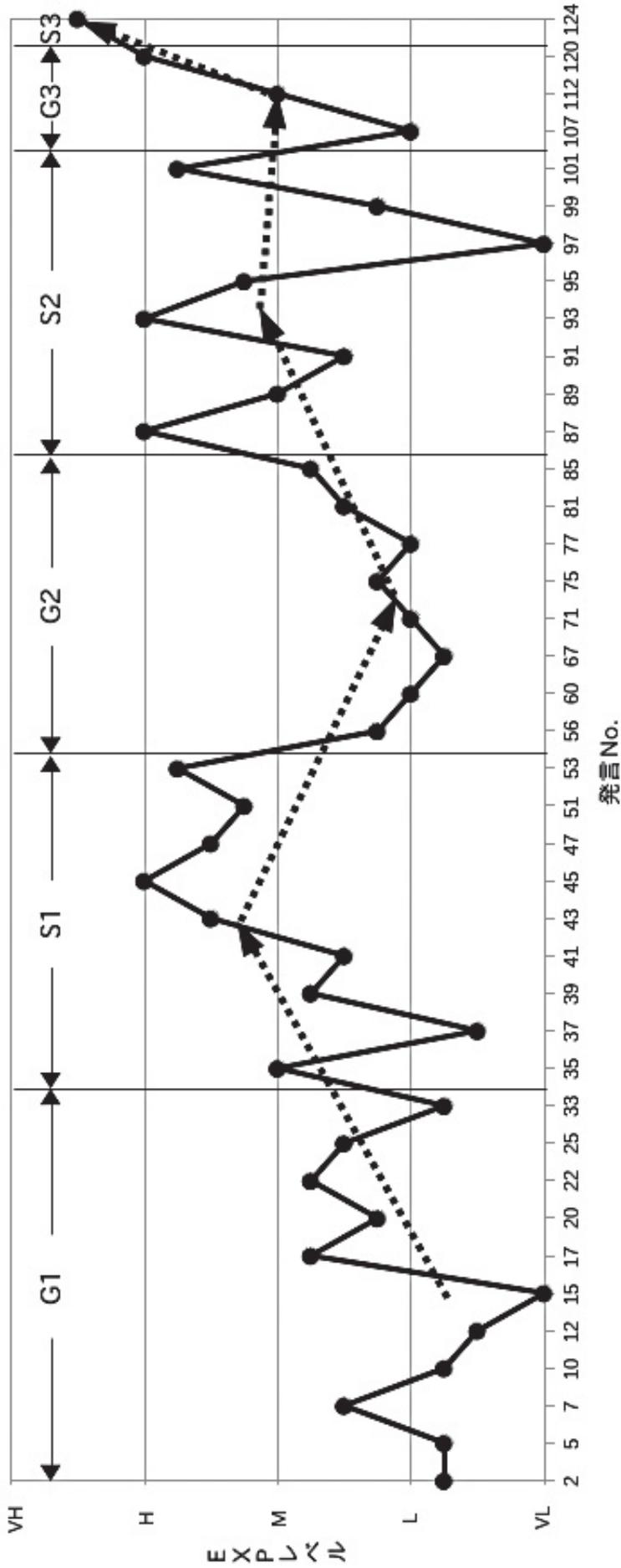


図3 本セッションにおける事例提供者のEXPレベルの推移

表3 各パートのEXPレベルの中央値およびピーク

	G1	S1	G2	S2	G3	S3
中央値	1.75	3.25	2.13	3.13	3.00	4.50
ピーク	2.75	4.00	2.75	4.00	4.00	4.50

(Gはグループパート, SはPCSパートを示す)

## 4-2 今後の課題

### 4-2-1 評定値の信頼性の問題

本研究ではリフレキシブPCAGIPの1セッションの分析をとおして、PCAGIP法にPCSを組み合わせることで、事例提供者がよりリフレキシブな方向へと動いていくことを論じた。しかし本研究はわずか1セッションのみの分析にとどまり、他のセッションでも同様の経過をたどるかどうかについては検討していない。そのためにはリフレキシブPCAGIPの複数のセッションを同様の方法で分析する必要があるだろう。

今後本研究と同様の分析を行う上で、まず体験過程スケールによる評定値の信頼性の問題について検討する必要がある。本セッションのEbel (1951) の級内相関は  $r_{44}=.70$ であった。筆者らと同様にセッションの全発言を体験過程スケールで評定した吉良ら (1972) では  $r_{kk}=.55$ であった。吉良ら (1972) と比べると本研究の信頼性は高いといえる。ただしこれは7段階のスケールによるものである。また三宅ら (2007) は7段階スケールによる評定値の級内相関として  $r_{44}=.95$  (モード) および  $r_{44}=.96$  (ピーク) を、また5段階スケールで  $r_{44}=.96$  (モード) および  $r_{44}=.96$  (ピーク) を示している。これらと比べると本研究の  $r_{44}=.70$ はかなり低い値といえる。ただし三宅ら (2007) の評定は6セグメントのモードとピークに関するものであり、全発言を評定した本研究と単純に比べることはできない。

本研究の信頼性をどのように評価するかについては議論がわかれるところであろうが、表2にも示したように、評定値が評定者によってかなり異なる場合がある点も考慮する必要があるだろう。

さらに、本研究では池見ら (1986) と同様に、4人の評定者が評定した値の算術平均を各発言の評定値としている。しかし体験過程スケールは順序尺度であり、代表値に算術平均を用いることは適切とはいえない。

以上をふまえると、吉良ら (1972) のように評定者間の話し合いによって評定値を1つに定める、EXPチェックリスト (久保田・池見, 2017) を用いる、コンピューターによる評定プログラムを開発するなどといった、評定の精度を高める努力が必要といえるだろう。

### 4-2-2 グループパートの評価

また、本研究では体験過程スケールを用いてリフレキシブPCAGIPのプロセスを分析したが、EXPレベルはあくまでフォーカシング指向心理療法の視点による指標である。EXPレベルの高低のみでグループ・アプローチの一種であるPCAGIP法のよさを評価することはできない。そもそも、EXPレベルを高めるだけでよいのなら、グループパート自体が不要ということになってしまう。グループパートを適切に評価するためには、フォーカシング指向心理療法以外の視点が必要といえる。

PCAGIP法の利点の1つは、多様な参加者から多様な視点が得られることである。多様な視点がグループ内に立ち現れている状況の評価するための概念として、PCAグループ (村山, 2014) の「バラバラで一緒」やオープン・ダイアログの「ポリフォニー」が挙げられる。

「バラバラで一緒」について、村山 (2014) は「メンバー一人ひとりがお互いの違いを尊重しながら、グループとしてつながれる雰囲気を目指し、強力な『一体感』よりも『連帯感』を大切にしている」と述べている。

また「ポリフォニー」について、Seikkula & Olson (2003) は次のように述べている。「意見が食い違ったときに大事なことは、正しいか間違いか白黒はつきりさせるのではなく、すべての声を受け入れられ、傾聴とやりとりが促されることです。これはなにも、あらゆ

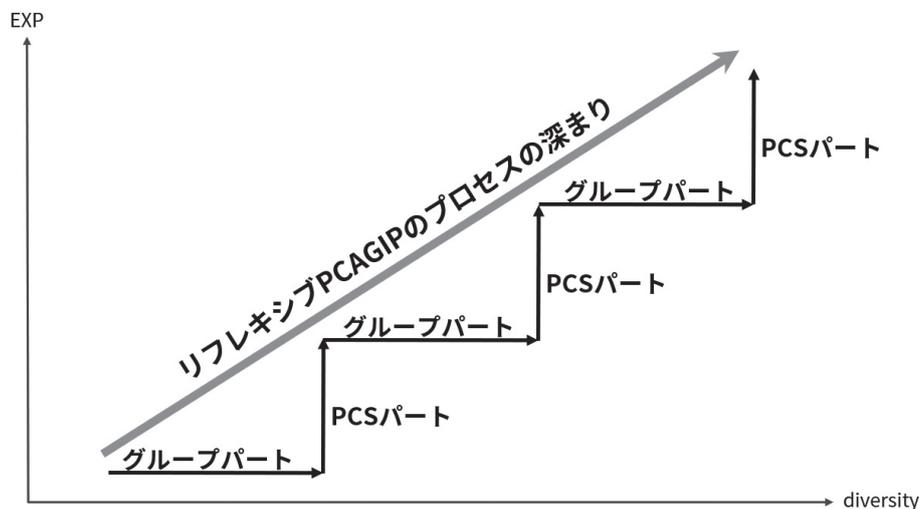


図4 グループパートを適切に評価した場合に想定されるリフレキシブPCAGIPのプロセス

る見方を受け入れるべき、という意味ではありません。もちろん同意しない自由もあります。安全な雰囲気のもと、異なった視点が表明されることから、ポジティブな変化が生じてきます。この場合のゴールは、苦勞してコンセンサスに至ることではありません。理解と理解を結び合わせることで]

「バラバラで一緒」または「ポリフォニー」といった観点からグループのプロセスを評価することができれば、図4に示したようなイメージでリフレキシブPCAGIPのプロセスを捉えることが可能になると考えられる。図4の横軸は視点の多様性、縦軸はEXPレベルを示している。グループパートで多様な参加者から様々な視点が得られることで、理解が広がる。次にPCSパートで事例提供者のEXPレベルが高まる。再びグループパートで視点が広がり、再びPCSパートで事例提供者のEXPレベルが高まる。この繰り返しで、グループパートでの広がりやPCSパートでの深まりの両方がかけあわされたプロセスを検証することができるだろう。

#### 4-2-3 ファシリテーターや他の参加者のプロセス研究

本研究では事例提供者のEXPレベルの推移を評定するにとどまり、facや他の参加者のプロセスを検討していない。

たとえばPCSパートにおいて、事例提供者とファシリテーターのやり取りを見守っている他の参加者は、2人のやり取りを見守りながら、自分の考えをまとめたり、事例提供者の話聞いてどんな方向性の質問をすればよいか等について考えたりしていると思われる。つまり、PCSパートは、事例提供者だけでなく、他の参加者に影響を与えていると考えられる。

また、河崎（2013）が「リフレクションが促進的に機能するにはセラピストのリフレキシブ・モードが必要である」と述べていることから、facや他の参加者のEXPレベルの高低が事例提供者のEXPレベルに影響を及ぼしていることも考えられる。

以上をふまえると、facや他の参加者のプロセス研究が必要といえる。具体的には、セッションのやり取りの録画記録、または録音記録を見たり聞いたりしながら参加者自身がどんなことを考えたり感じたりしていたかを語ってもらう対人プロセス想起法（Kagan & Schauble, 1969）や、体験過程スケールのセラピストバージョン（Klein, et al. 1986）を用いた研究を今後行う必要があるだろう。

#### 文献

- Ebel, R.L. (1951). Estimation of the reliability of ratings. *Psychometrika*, **16**, 407-424.
- 池見陽・田村隆一・吉良安之・弓場七重・村山正治（1986）．体験過程とその評定—EXPスケール評定マニュアル作成の試み, 人間性心理学研究, **4**, 50-64.
- Kagan, N., & Schauble, P. G. (1969). Affect simulation in interpersonal process recall. *Journal of Counseling Psychology*, **16** (4), 309-313.
- 河崎俊博（2013）．体験過程促進的な応答を巡って—ReflectionとReflexive mode, 心理臨床カウンセリンググループ紀要, **4**, 29-35.
- Klein, M. H., Mathieu-Coughlan, P., & Kiesler, D. J. (1986). The Experiencing Scales. In Greenberg, L. S., Pinsof, W. M. (Eds.). *The Psychotherapeutic Process: A Research Handbook*, pp.21-71.
- 久保田恵実・池見陽（2017）．体験過程様式の推定に関する研究—EXPチェックリストII ver.1.1作成の試み, サイコジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要, **7**, 57-66.
- 村山正治（2012）．PCAGIP法とは何か, 新しい事例検討法PCAGIP入門—パーソン・センタード・アプローチの立場から, 創元社, pp.12-21.
- 村山正治（2014）．PCAグループの理論と実際, 「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門—新しいエンカウンターグループ法, 創元社, pp.12-21.
- 村山正治・樋口昌巳（1987）．体験過程の促進からみたエンカウンターグループ—体験過程スケールによるエンカウンターグループ過程の分析, 人間性心理学研究, **5**, 88-98.
- 押江隆（2015）．パーソン・センタード・アプローチとスーパービジョン, 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, **6**, 27-34.
- 押江隆・藤田洋子・植木美紀・多田佳歩・鞠川由貴・溝口英登・森原梓・山本優子・渡邊弓子（2016）．PCAGIP法にパーソン・センタードな個人スーパービジョンを組み合わせた「リフレキシブPCAGIP」の開発, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **39**, 109-118.
- Seikkula, J., & Olson, M. E. (2003). The open dialogue approach to acute psychosis: Its poetics and micropolitics. *Family process*, **42** (3), 403-418. (斎藤環訳（2015）．精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス, オープンダイアログとは何か, 医学書院, pp.81-115.)

## 謝辞

本研究にご協力くださった事例提供者および参加者の皆様に、厚くお礼申し上げます。本論文は日本人間性心理学会第36回大会（2017）にて発表したものに加筆・修正を加えたものです。座長の労をおとり下さり、さまざまなお助言をいただいた東亜大学の村山正治先生に、厚くお礼申し上げます。